

高度医療人材養成拠点形成事業（高度な臨床・研究能力を有する医師養成）
タイプA 取組の概要と推進委員会からの主なコメント

代 表 校 名 (連携大学 名)	京都大学
事 業 名	AI の活用と屋根瓦式教育によるクロスフィールド人材養成拠点事業 Kyoto NEXT (Near-peer Education and dX “hub project” for clinical and research Training)
事 業 責 任 者	京都大学大学院医学研究科長 伊佐 正
事 業 の 概 要	
本事業では、AI の活用と屋根瓦式教育により、人材育成と効率性を同時に追求する。「AI による省力化が可能な雑用」と「人が成長できる業務」を区別し、前者は AI を効果的に活用することで、後者は屋根瓦式教育を活用することで個々人のスキルアップと業務の分散・効率化を同時に達成する。屋根瓦式教育は学生・大学院生を組み込み、研究から臨床教育まで切れ目なく展開する。さらに総合大学であることを活かした京都大学の幅広い人材や、長い歴史の中で蓄積した豊富な臨床研究の実績、先端医療研究開発機構（臨床研究支援部門、データサイエンス部門、非臨床開発戦略部門、早期臨床試験実施部門を含む）が有する強力な研究支援機能を活かし、大学の枠組みを超えた多職種・分野横断的な人材養成を可能とする拠点を形成する。本事業により、本邦で現在活躍する研究人材を効果的にサポートするとともに将来活躍する人材を育成し、持続的に発展させていく。	
推進委員会からの主なコメント ○：優れた点等、●：改善を要する点等	
○事業のアウトカムとして臨床研究論文数の目標を明示していることは、取組への意気込みを示すものとして評価できる。 ○Clinical Educator の認定、大学生、医学生 of SA、TA、RA への登用、医師以外の他職種の教育補助者としての登用による多職種教育チームの構築等により、教員の負担軽減と診療参加型臨床実習の充実を実現する計画となっている。 ○本事業が取り組む屋根瓦式教育による人材育成と活用は、他大学の参考となることが期待できる。 ○学生への指導について、コロナ禍の影響による変化も考慮されていることは評価できる。 ○AI の活用により医師が臨床研究の中で行う作業を大幅に効率化する計画となっているのは評価できる。 ○先端医療研究開発機構やクリニカルバイオリソースセンターでのデータ活用等が優れており、本事業計画を通じた他大学とのデータ・試料共有が一層進むことが期待される。 ○先端医療研究開発機構に専任職員が 115 名在籍している ○医学部と附属病院の役職者の役割が明記されており、連携体制が良く検討されている。 ●従来の京都大学での研究者育成を超える取組を期待したい。 ●教員の負担軽減について、より検討することが望ましい。 ●独自のレベルは高いが、提携大学や企業がより示されることが望ましい。 ●継続に充当する資金の確実性が不明確であり、早い段階からの検討しておくことが望ましい。	